## 福西　浩：「リベラルアーツで育むグローバル人材」への質問・コメント

### Ⅰ．グローバル人材について

| | |
|---|---|
| 質問・コメント | 「グローバルタレント」の概念は、私たちのモチベーションも高める効果があり、推進する価値があると感じた。私も、学力はもちろん、どこに行っても恥をかかないようにいろいろな力・スキルを身につけたいと思う。 |
| | グローバル人材になることはこれからの世の中を生きていくためにとても必要だと思う。グローバル人材というといろいろな世界の人と交流をしなければいけないので、まずコミュニケーション能力（日本人同士も含めて）が必要である。基礎ゼミなどはそれを育てるのにとても良いと思った。 |
| | 事前配付資料のレジュメに何度か「グローバルな視点」という言葉が出てくるが、「グローバルな視点」とは具体的にどのような視点のことか。 |
| | グローバル人材に求められる能力としてあげられていた項目（スライド 13）は、何をもって獲得したと言えるのでしょうか？ |
| | グローバルな人材となるための条件として、積極的な学習が不可欠であり、大学は学ぶ場であることを再確認できた。 |
| | 日本では大学に入るための勉強がピークであり、大学入学後は米国よりずっと勉強時間が少ないが、本来、グローバルな人材を育成するには社会に出るために勉強する時期、つまり大学でより学び、社会に触れることが大事なのかなと感じた。 |
| | 東北大学の一般教養科目はグローバル人材に必要とされる能力（コミュニケーション能力など）の基礎として機能しているのか。（私はイマイチ感じられない） |
| | グローバル人材を育むためのゼミなどはたくさん開講されているが、そういう場に自ら行かない人たちのために必修科目などでグローバル人材を育む機会を設けたりしているのですか？ |
| | これから企業が求める「グローバル人材」について、個人の強みを発揮することに関しては現在の教育課程では難しいと思う。小・中・高の教育では決められた答を導くことが重要なので、様々な個性が生かされないし、個性を生かすことに抵抗を感じる様に育ってしまう。大学教育ではある程度個人の特性を生かせる環境は整っているが、大学に入学するころには、多くがそれまでの教育によってその環境を生かせない学生になってしまっていると思う。 |
| | グローバル人材育成のためにはやはり英語能力は必須ということなのでしょうか。 |
| | 日本的発想を活かすということをふまえてグローバルに活動すべきで、英語で考えたらアメリカンな発想しかできないのでは。 |
| | グローバル人材になる上で留学などの海外経験は絶対的に必要でしょうか。 |
| | グローバル人材に必要な異文化への理解を深めるために留学は有効な手段だと思うが、短期ならともかく長期の留学によって、かえって就活で他の学生に遅れをとるおそれはないのだろうか。 |
| | 文理（個人的にこの区別は嫌いですが）では相対的に理系の方が国際交流が盛んな印象がある。個人的感覚だと法学部は全くと言っていいほど機会はなく、外部（外務省や内閣局、国際交流基金など）の制度に頼らざるを得ない。留学にとらわれない、遊学のようなもっと自由な勉学、その機会を大学で用意できないか。 |
| | グローバル人材というが、海外で生活することで得られることは何なのか。その苦労は大変なものだと考えられるがその一歩を踏み出す勇気はどこから得られるのか。 |
| | グローバルな人材が求められる現在の状況に関わらず日本人の多くは内的思考が働いて積極的に外に出ていこうという人が少ないような気がする。それは日本の制度的な問題だろうか？それとも日本人の特質だろうか？意見をお願いします。 |
| | 指摘された能力、求められる人物像などは自分たちもよく耳にし考えていることのように思います。自分の場合、問題なのはそこから考えたこと、解決策を実行に移す行動力がないことです。この消極性をどのように改善すればいいのでしょうか。何かアドバイスを頂けますか？ |
| | グローバル人材は必要だと思うが、大学生全員がグローバル人材になる必要はないと思った。 |
| | 「グローバル人材」は大企業であれば必要かつ採用する余裕があるが、日本において大企業（0.3％）、中小企業（99.7％）と言われる中で、中小企業に対してグローバル人材の需要があるか。 |
| | 将来めざしている職業が日本国内に限定された職であり、その分野でどんなに貢献しても世界に対して影響を与えられない場合、「世界で活躍できる人材」になるべきか疑問なのですが、それでもグローバル人材にならなくてはいけないのでしょうか。 |
| | 企業から教養のある人材や、グローバル人材を求められていることはわかったのですが、そうすると、学生は大学での勉強によって企業に求められるような人材になることが重要なのでしょうか。 |

| | |
|---|---|
| 質問・コメント | グローバル化が進む中で、企業の力をのばすために一人ひとりのモチベーションを上げる方法が提示されました。しかし、現状では企業は競争力を上げるために就業時間をのばしたり、人件費をカットしたりとモチベーションを低下させる要因で満ちていると私は思います。どうすれば、モチベーションを上げる方法で企業の競争力を上げられると思いますか。 |
| | 日本はバブル崩壊後、経済発展が横ばいで、20年も続いている。高等教育だけを改革し、グローバル人材の育成に力を入れても、社会全体と国家政策を変えない限り、日本経済が大きく発展することはできないと思う。 |
| **まとめと回答** | |
| 質問 | グローバルな視点とは何か。またグローバル人材に求められる能力は何をもって獲得したと言えるのか。 |
| 回答 | 「グローバルな視点」というのは世界標準のものの見方があるとかアメリカやヨーロッパの真似するとか、そういうことではなく、「多様な角度、切り口から物事を考える」という視点である。世界には様々な考え方があり、一つの出来事に対しても様々なアプローチが考えられる。真のグローバル人材は、多様な切り口から物事を考え、これまでに他の人が思いつなかった新しい見方を世界に提供できる人だ。したがって、「グローバル人材に求められる能力は何によって獲得されたと言えるか」という質問に対しては、自分自身が多様な切り口から物事を考えられるようになったと感じた時点でその能力を獲得したと言えるのではないだろうか。 |
| 質問 | 東北大学の現在の教養教育でグローバル人材を育むことができるのか。大学だけでなく、小中高の教育改革も必要ではないのか。 |
| 回答 | 現在、東北大学では教養教育を重視し、専門教育と教養教育の相乗効果によってグローバルに活躍できる人材の育成を目指している。受験勉強から大学での学びに切り替えるための基礎ゼミに加え、今年からその発展型としての展開ゼミもスタートした。語学教育や情報教育の改革も進んでおり、短期・長期留学コースも拡充してきた。平成26年度からは学部・大学院一貫の新しい教養教育プログラムもスタートすることになっている。このように東北大学の教養教育は日々進化しているので、改革が進んでいる部分に積極的にチャレンジする行動力が大事ではないだろうか。グローバル人材を育成するためには大学だけではなく、小中高の教育改革も当然必要で、小中高でもディスカッションをもっと重視すべきだろう。 |
| 質問 | グローバル人材に英語能力は必須か。英語で考えたらアメリカンな発想にならないのか。 |
| 回答 | 英語は国際的なコミュニケーションの一番基本なので、英語能力はグローバル人材には必須である。ただ英語能力は単に会話ができるということではなくて、英語で物事を考えることができるかどうかというレベルが求められる。大学院の学生は自分の研究成果を英語で書き、英語で発表するのが日本でも普通になってきている。英語で考えられるレベルにならないと国際的に理解してもらえる論文を書くことができない。英語能力とアメリカンな発想は別問題で、日本人に求められているのは日本人の発想を国際レベルの英語で世界に発信することだ。 |
| 質問 | グローバル人材になる上で留学などの海外経験は絶対的に必要なのか。留学で就活に遅れを取るおそれはないのか。海外で生活するには勇気が必要だが、その勇気はどこから得られるのか。 |
| 回答 | 日本の多くの学生が行動力がなく、一歩を踏み出す勇気はどうして得られるのかで悩んでいる。行動力がないのは日本で生活している限り受身な態度で生活していても特段問題が起きないからだ。しかし海外で暮らすと何事も自から行動しなければ生きていくことができない。留学の第１のメリットは行動力の大切さに気づき、行動力が身につくことである。第２のメリットはコミュニケーション能力が格段に進歩することである。様々な国の人と友だちになることによって、多様な考え方を知り、多様な見方ができるようになる。もちろん英語能力も高められる。第３のメリットは大学での学びとは何かを体で知ることができることである。ディスカッション中心の海外の大学では自ら考え、それを発表し、議論する能力がなければ単位を取ることができない。したがって留学はグローバル人材になるための最も有効な手段である。留学で就活に遅れると心配することがいかに視野の狭い考え方であるかも留学すればすぐ気づくことができる。東北大学では世界の様々な大学に留学が可能なのでぜひ挑戦してほしい。 |
| 質問 | グローバル人材は大企業が必要としており、中小企業でも需要があるのか。自分が目指している職業が国内だけを対象としている場合に、それでもグローバル人材にならなくてはいけないのか。 |
| 回答 | グローバル人材を必要としているのは別に大企業だけでなく、日本のあらゆるところだ。例えば、少子高齢化社会を持続可能な社会にしていくためには国家も地方自治体も、世界のさまざまな取り組みに学び、新たな方策を考え出さなければならない。中小企業でも農業でも、世界から学び世界に製品や生産物を送り出すのが当たり前になってきた。日本の社会の変化は激しく、企業の変革も速いスピードで進行しているので、自分が目指している職業が国内だけを相手にしていると断定することは絶対にできないだろう。 |
| **Ⅱ．コミュニケーション能力について** | |
| 質問・コメント | 福西先生のお話を聞いたことで、私は今すぐアクションを起こす必要があると考えた。例えば①様々な人とのコミュニケーション・交流（＝異文化交流）、②幅広い知識・考え方の習得だろう。このような取り組みの中で自己を育成していきたい。 |
| | 教養において、最も必要なのはコミュニケーション力であるという考えにはとても共感をもてました。 |
| | コミュニケーション力が大切だという印象をうけたのだが、具体的にどのようにしてその力を身につければよいか。 |

<table>
<tr><td rowspan="6">質問・コメント</td><td>日本人は内気な性格の人が多いため、コミュニケーションをとるのが苦手な人も多い。その中でコミュニケーション能力やグローバルな視点を身につけるにはどうしたら良いとお考えでしょうか。</td></tr>
<tr><td>コミュニケーション力は日本においては「上司とうまくやる能力」と化してませんか？また、コミュニケーション力はどうやったらつきますか？</td></tr>
<tr><td>コミュニケーション能力の必要性（英語力など）は何となく理解できるが、やはり本質的な対人コミュニケーション能力は全学教育ではあまり身に付かないのではないか？課外活動のような対外志向の活動を全学教育にももっと取り込むべきでは？</td></tr>
<tr><td>コミュニケーション力・社交力について話されていたが、ただ単に大学の講義を聴いたり、ディベートしても、それらの能力は特異的・限定的にしか身につかないのでは？例えば、サークル、バイト、学外での活動で人と人とのかかわりの中で身につけられるものだと思います。</td></tr>
<tr><td>就活から話はそれますが、外国人の方とコミュニケーションをとる上で、高校・大学レベルの英語力は必要だと思いますか？</td></tr>
<tr><td>英語があくまでコミュニケーションのツールであるというのは理解しているつもり。ただ、思考のツールにまでしてしまうのはどうなのかと思った。</td></tr>
<tr><th colspan="2">まとめと回答</th></tr>
<tr><td>質問</td><td>コミュニケーション能力は具体的にどうやって身につけることができるのか。教養教育ではあまり身につかないのではないか。</td></tr>
<tr><td>回答</td><td>大学での学びでは自らの知的好奇心を高め集中することによって様々な能力を短期間に獲得することができる。コミュニケーションに必要な英語、第２外国語、情報処理技術、情報活用技術に関しても、教養教育で受身に学ぶのではなく、創意工夫で様々な努力をすれば短期間に高いレベルに到達することは可能である。またコミュニケーションに最も必要なことは相手への関心であるので、普段から仲間同士だけでなく、様々な年代の人々との会話を楽しむ態度が大事である。</td></tr>
<tr><td>質問</td><td>コミュニケーションのために英語能力は必要か。思考のツールとしても必要か。</td></tr>
<tr><td>回答</td><td>英語は国際的なコミュニケーションツールとしてあらゆる分野で使われている。世界各国の最新のニュースや各種情報が英語で発信され、研究成果も国際誌に英文で掲載される。東北大学でも大学院生になると英語で論文を書き、国際会議では英語で発表している。したがって英語能力を高めることは最新情報を得るために、また発信するために必要不可欠である。英語能力には話す、聞く、書くの能力があるが、どの能力も英語で考える能力（英語での思考力）がなければそれらは向上しない。</td></tr>
<tr><th colspan="2">Ⅲ．学習時間の日米比較について</th></tr>
<tr><td rowspan="11">質問・コメント</td><td>リベラルアーツの日米比較のグラフにおいて、日米であれほどやる気に差があることに驚いた。どうしてこのような差が生まれてしまうのだろうか？</td></tr>
<tr><td>なぜ、日本の大学生の勉強時間は米国の大学生よりきわめて少ないのでしょうか。</td></tr>
<tr><td>日本の大学生は冷めていて、勉強時間も足りていない学生が多いということでしたが、原因は何だと思いますか。</td></tr>
<tr><td>国際的にも、「日本人はまじめだ」と言われているのを耳にすることがあるが、なぜアメリカの大学生と比べて日本の大学生は学習時間が少ないのか疑問に思った。</td></tr>
<tr><td>学習時間が長いほど学力が高いとは限らないのではないか。</td></tr>
<tr><td>学習時間が少ない日本の状況をあまり悲観的に見てはならないと思います。効率の良さを求めている部分もあるのではないでしょうか。</td></tr>
<tr><td>日本とアメリカの学生の学習時間比較について話されたが、これは講義形式や難易度、課題等も関係してくるのだろうか。</td></tr>
<tr><td>日本の大学には「楽勝科目」があり、米国にはないなどの大学のシステムの違いについて言及されていましたが、グローバル人材を育成する上での大前提となる学力を養うためには日本の大学も米国のようなシステムを取り入れなければならないと思われますか。</td></tr>
<tr><td>大学に入って大学生のやる気のなさを身に染みて感じている。そこに意識を置いて大学改革を起こそうとしている東北大学はなかなかすごいと思う。</td></tr>
<tr><td>諸外国の大学生の学習時間はどのくらいなのか。日本だけが少ないのか。</td></tr>
<tr><td>日本の学生の学習時間をグローバルスタンダードくらいまで増やすにはどんな制度をとり入れたらよいとお考えですか。</td></tr>
</table>

| | |
|---|---|
| 質問・コメント | 日本の学生の自習時間は少なく、冷めた学生が多いと言われましたが、どうしてそうなのでしょうか。私の考えとしては、1つの原因として、日本では社会に出てから長期の休暇がとりずらい。大学生のうちしか遊べない、と思っている人が多いから（事実だと思いますが）だと思います。少なくとも、私たちがよく情報を手に入れるネットの中では「休みがなくてツライ」、「残業のせいで休日も寝すごしてしまう」など聞きます。このような中で、大学生時代も勉強して、社会の中に出てから役に立つようにしようと思う人は少なくなるのは当然だと思います。今のうちに遊んでおこうと思う人の方が多いでしょう。企業が「このような人材が欲しい」と思うのなら、企業が変わる必要もあるのではないでしょうか。 |
| | アメリカの学生が日本と比べてよく勉強する理由として、大学教師が単位を冷厳に落とせるからであり、その背景には日本とは異なって学生からの学費に多くを依存しないアメリカの大学の財政構造がある、と聞いたことがあるのですが、そのような見方は妥当なものでしょうか。 |
| | アメリカの大学生との学習時間比較で、日本が冷めているように見えるのは日本が大学に入りやすく、アメリカはやる気のある人しか大学に進学しないでいるという別の問題があるのではないでしょうか？ |
| | 大学全入時代すなわち誰もが大学に入れる時代となっていることが問題ではないか？勉強せずに大学に入学し、勉強せずに卒業する、そういった人の増加が全体の学習時間の低下につながっていると思う。 |
| | 学習時間のデータや、日米の成績評価方法には注目しているが、文化的・社会的制度の違いによってこのような差が生まれている可能性はありますか？ |
| | 日本で、学力のある人≒お勉強ができる人、というと、むしろキー・コンピテンシーの3つのカテゴリー（道具の活用、異質な集団でともに活動、自律的な活動）に欠ける、といった風にイメージされがちなように思うが、アメリカではそうではないのか。 |
| | スライドはちょっと横文字多くて読みずらい。アメリカのように社会人学生が多かったら大学が楽しくなりそう。日本人学生に「冷めている」人が多いのは夢を見ていないからでは？僕もそのうちの一人ですが。もうこれは国民性であって根深いものだから、それを直そうとするのではなく、活かすというか。無理に表舞台に出ようとしなくてもよいのでは？地道に、緩やかに。 |
| | 米と比べて日本の学生の学習時間の圧倒的少なさに驚いた。しかし、米国は中高生のうちからアルバイトができたり、生活の自由度が高いが、日本は校則などによる制約が多い中高生時代をおくらねばならないことが多い。そのような状態で大学でも米国のようなGPAの制度をとり入れては日本人はバイトやサークル、ボランティアなどで学べる社交性やコミュニケーション能力、経験を得られないのではないかと思った。 |
| | アメリカの大学生の意識が高いというのは分かったが、そういったものはそれ以前の小中高での教育が関係している点もあるのではないか。日本の小～高校までの教育と大学教育には大きな隔たりがあるように思う。 |
| | 日本の学生の多くは勉強をあまりしていないというが、これは勉強の定義にもよるのではないか。単に机に向かって本を読んだり辞書を引くことだけが、大学生の勉強ではないと思う。例えば、アルバイトであっても接客をすることがコミュニケーションスキルを高める1つの勉強であるともいえるのではないでしょうか。日常生活で自分が行っていることが知らず知らずのうちに将来役に立つスキルにつながっていることもあるのではないでしょうか。 |
| | 日本と諸外国の大学生の学習に対する意欲の差は、求められる人物像の違いにあると思う。海外で求められる人材とは、コミュニケーション能力と主体性に富んだ競争に強い者であるのに対し、従来の日本で求められる人材は、競争力はなくとも企業の求めることに忠実で協調性に富んだ者だと考えられる。最近の日本はグローバル化の影響で、徐々に企業型態も変化しつつあるようだが、その人材を育てるための教育体制の整備がまだ途上にあると思う。だから現在の大学生らは現代の日本企業が求める人物像へと育てる教育を十二分に受けることができていないため、欧米の学生とはどうしても差異が出てしまうのだと考えられる。 |
| | 米国の大学生と日本の大学生の学習に対する意識の差について、GPAを重視するかどうかも違いを生む原因となっていると思うが、就職後の自由度も差を生み出す原因となっていると思ったが、それは正しいか。 |
| **まとめと回答** | |
| 質問 | 日本の大学生の学習時間が米国の大学生よりもきわめて少ないのはなぜか。グローバルスタンダードくらいまで学習時間を増やすには米国のようなシステムを取り入れなければならないのか。 |
| 回答 | 日本の大学生の学習時間がきわめて少ない理由として、①学生の目的意識、②社会・企業が大学生に求める能力・人物像、③単位の評価システム、④大学入試制度、⑤小中高時代の教育など、様々な要因が考えられる。しかもそれらの要因が互いに複雑に絡み合っているので、特定の要因だけを取り上げ、その解決策を検討しても効果はあまり期待できない。しかしこの問題は大学のレベルを直接左右する問題であり、大学教育システムの大胆な改革が緊急課題となっている。社会・企業の求める能力・人物像はすでに急激に変わりつつあり、グローバルな視点でこれからの時代を切り開くことができる総合力を求め出した。これに対応して多くの大学で入試制度、教養教育の高度化、単位評価システムの改善が始まろうとしている。東北大学も教養教育改革を継続的に進めてきたが、平成２６年度からは国際レベルの教養教育を実現するために、高等教養教育・学生支援機構の設置という大規模な改革が始まろうしている。 |
| 質問 | 日米の学習時間の差は企業や社会が求める人物像に違いがあるからではないのか。海外で求められる人材はコミュニケーション能力とか主体性に富んだ競争に強い人であるのに対して、従来の日本の企業は協調性に富んだ人を求めていたと思う。 |

| | |
|---|---|
| 回答 | 上の質問１への回答に記したように、日本でも企業や社会が求める能力・人物像は急激に変わりつつあり、グローバル人材への需要が高まっている。学部１年生にとって大事なことはこれまで日本の企業が求めてきた人物像に注目するのではなく、これからの社会はどのような人材を必要とするのかを考えることだ。 |
| 質問 | 日本では冷めた学生が多く、アメリカではやる気のある学生が多いのは、大学全入時代すなわち誰もが大学に入れる時代になったことが問題ではないのか。 |
| 回答 | 大学進学率は日本が51％であるの対して、オーストラリア96％、米国74％、韓国71％、イギリス63％で、日本の進学率は先進国では決して高くない。大学全入時代が問題ではなく、大学生自身が大学でどのような能力を習得しようとしているのか、また社会・企業が大学にどのような人材育成を期待しているのかが問題となっている。 |
| 質問 | 日米の学習時間の差は文化的・社会的制度の違いによるのではないのか。 |
| 回答 | これまでの日本の大学は社会人になる前のモラトリアム期間となっており、就職してから現場で時間をかけて教育していくシステムがあった。しかし現在は企業の盛衰が激しく、ゆっくりと企業で人を育てる余裕がなくなっている。企業は第一線で直ぐに活躍できるグローバル人材を求め出した。また企業がイノベーションを生み出すためには多彩な人材が必要であり、学生にも専門性に加えてコミュ二ケーショ能力やリーダーシップなど総合力を求め出した。したがって学習時間の差を文化的・社会的制度の違いに帰することはできなくなっている。 |
| 質問 | 米国の大学生の意識が高いのは自由度の高い小中高時代の教育に関係しているのではないのか。小中高時代に自由度の低い日本では大学時代にアルバイトやサークル活動で社交性やコミュニケーション能力を身につけることは必要ではないのか。 |
| 回答 | 大学生の意識改革のためには小中高時代の教育改革も当然必要である。特にコミュニケーション能力を高めるには小学生の頃から英語教育やディスカッションを重視した教育が必要である。大学生活においてアルバイトやサークル活動はコミュニケーション能力を身につける上で一定の効果はあるが、グローバル人材に必要なコミュニケーション能力はこのレベルではなく、より高度なコミュニケーション能力であり、語学力、情報処理力、問題発信力、社交性などが必要になる。 |
| 質問 | 米国の大学生がよく勉強する理由として、米国ではGPAを重視し、厳密な成績評価を行なっているからではないのか。 |
| 回答 | 米国の大学では奨学金給付学生の選考や大学院進学者の希望コースの選考は全てGPAによって行なっている。また大企業はGPAを非常に重視し、面接の基準（大部分の企業が3.0以上、一部は3.5以上を希望）として使用している。その理由はGPAを用いた学生の能力評価の研究が非常に進んでおり、信頼性が高く、どの大学のどの教授の授業をとったかも考慮できるようになってきた。日本の大学が一番遅れているのはGPA評価ができていない点で、日本のトップレベルの大学はGPA評価を早期に導入する検討を始めている。 |
| **Ⅳ．教養について** | |
| 質問・コメント | 教養というのは、百科事典に書いてあるようなことを暗記するということなのでしょうか？本来大学の役割とは高等教育以上の専門性の高い分野を学ぶ場であったはずです。現在のテストなどの点数を指標にしたものでは、教養というのは育まれないと思います。作家のミヒャエル・エンデの言葉に「教養とは、質の繊細な分別能力である」というものがあるように、私はそれは座学で学ぶべきものではないと思います。 |
| | 自らの多様性や価値観というのは、意識して変えられるものなのですか？それとも、何か特別な行動や出会いを通じて変わっていくものなのですか？ |
| | 教養を身につけたり、グローバル人材になるにあたって、読んでおいたほうがいい本や、経験しておいた方がいいことを教えてください。 |
| | 先生方が考える“教養“の身につけ方とはなんですか？ |
| | 「就活に役立つ？」などというサブタイトルをつけている時点で下心しか見えてこない。教養というふわふわしたものを身につけようと思ってつくものではないし、数値的に評価できるものでもない。つまり、大学から始めても遅いのでは？それまでペーパーテストの成績しか求められてこなかったんだから。 |
| | 諸問題には学生の問題だけでなく社会の問題もありそうです。 |
| | 高校でも、研究者と議論する機会が欲しいと思った。 |
| | あまり内容とは関係ないかもしれませんが質問させていただきます。教養を身につけたら、あるいは身につけようと努力したら、自分の就職・就活すべき分野は見つかるといえるでしょうか？将来どの方向に進むべきか迷っています。 |
| | 教養というものは自分の為のものだと思いますが教養をもつ者は社会の為になるのでしょうか。社会の為になるから教養をもっていると言えるのでしょうか。 |
| | 大学で学んだ教養知識とそれを活用する知識で社会に貢献するというが、大学生活では教養教育で得た知識を生かせるような場はあまりないのではないかと思う。実感が湧かなければ勉強のやる気もあまり起きない。 |
| | 大学教育は大切なのだと思ったが、その機会を自分が活かそうとしないと全てをムダにしてしまうのだろうなと感じた。 |

| | |
|---|---|
| 質問・コメント | 大学に入って、自分も含めて大学に入ることでひとつの意志が終わってしまっているように思えた。大学だけの努力では終わらず学生からも変えていかないといけないと思う。 |
| | 一般教養科目が職場で使われているのか。例えば線形代数学が職場でどういった役割をもっているかがわからないとモチベーションも上がらないし、日本人の勉強時間も増えないのではないか。職場でどのように使われているかを説明することも大学の役割なのではないかと思う。 |
| | 教養科目を受けることは教養を身につけることに直結するのか？ |
| | 教養教育のスタートは大学からで良いのか？大学入学時までに各自が教養を身につけ、大学ではたっぷりと専門教育に時間をかける、という方が大学にとってはむしろ効率が良いのではないか。 |
| | 「全学教育は雑学的知識を得る場」という認識が学生の間にはびこっているのではないかと私は考える。これでは教養の本質を突けないのではないかと思う。これは学校教育システムの問題か？それとも単に学生の態度の問題か？ |
| | 就職を前提としている場合、大学での専門科目は必要以上に多い可能性があると思う。そこで思ったのだが、大学では教養科目に力を入れて、専門も多様性のあるものにおさえ、それ以上は企業側が教育するということはできないのだろうか。なぜ大学院を卒業しなければ就職できないなどと言われるのだろうか。 |
| | 中国はどれほど教養教育に力を入れているのでしょうか。 |
| **まとめと回答** | |
| 質問 | 教養とは何か、またどうやって身につけたらよいのか。 |
| 回答 | 教養は英語の Culture（耕作､養育）やドイツ語の Bildung（形成､教化）の訳語で､教育を｢樹木の成長｣に例えれば､教養はその成長を担う「肥沃な土壌」に例えることができるだろう。教養は知識ではなく、知性を活性化し、人を自由にするための力である。教養は人間としての総合力であり､幅広い視点から物事の本質を思考できる力である。したがって自分が獲得した知識や情報の量は数値化できても、教養がどの程度身についたかを数値化することはできない。ではどうやったら教養が身につくのだろうか。最も大事なことは知的好奇心だろう。自然について、世の中の仕組みにつて、人間について、もっと知りたいという好奇心を高めることが大事である。また自分の殻から飛び出す行動力も重要だ。いろいろな人との出会いの中で自分が持っていなかった様々な考え方を知り、コラボレーションの重要性を肌で感じることができる。外国語の習得はコミュニケーション能力を高めるためだけでなく、日本人にない思考法を学ぶために重要だ。幅広い読書はもちろん必要である。教養教育院が作成し新入生全員に配布される「読書の年輪」には自分の視野を広めてくれる 54 冊の本の紹介があるので役立ててほしい。大学生活をアクティブに過ごすことができれば教養は自然と身についていくだろう。 |
| 質問 | 教養は就職や就活に役立つのか。 |
| 回答 | 教養は人間としての総合力であるので当然就職や就活に役だつと考えられる。教養を身につけた人は他者とのコミュニケーション能力やコラボレーション能力が高く、知的好奇心も高いので、日本の社会が求めている新しい発想で未来を切り開く力がある人材になることができるだろう。 |
| 質問 | 大学の教養教育で教養は身につくものなのか。 |
| 回答 | 教養教育をいろいろな知識（雑学）を獲得する場と考えていれば教養は決して身につかないであろう。幅広い知識を学ぶ中で、自らの好奇心を高め、興味がある事柄に出会えばそれを深く追求し、思索を巡らし、周りの人と議論を重ね、新しい発見をする。そうしたプロセスの繰り返しの中で教養は身についていくものだ。最低のエネルギーで教養教育の単位をとるという姿勢では教養を身につけることはできないのは明らかだ。 |
| **Ⅴ．就職について** | |
| 質問・コメント | 労使間の互いに求める要求が正反対な中、どうやって今後日本は成長していくのか。アメリカ的か、スウェーデンなどのようにいくのか、どちらが日本にはよいとお考えなのか。 |
| | 雇用形態の多様化とありましたが、具体的にはどういったものが新しくできたのですか？ |
| | 「従業員の自由度とモチベーションを上げ」というお話がありましたが、非正規雇用拡大、正社員の長時間労働化などが起こっているために、現実には従業員のモチベーション上げに成功している企業は少ないように思います。 |
| | スライド 10（大学進学率の日米比較）のように日本の進学率は課題であるし、国際会議でも Ph.D を持たない大臣がほとんどであるのは日本くらいである。しかし、“新卒“という伝統的雇用体制、若さと OJT がある中で博士課程進学を望む学生、企業はどれだけ存在するのか。 |
| | 先生自身が採用したい教養ある人材はどんな人材でしょうか。 |

| まとめと回答 | |
|---|---|
| 質問 | 従業員のモチベーションを上げることに成功している企業はあるのか。 |
| 回答 | 今までは終身雇用や年功序列などの習慣があって、企業の組織と従業員は縛り・縛られる関係だったが、これからは企業は自由度の高い組織に転換し、企業と従業員は共に成長していくパートナーとなる必要がある。そうすれば従業員のモチベーションが上がり、組織全体の能力も引き上げられることになる。伸びている企業は必ずそうした方向を目指している。 |
| 質問 | 博士課程進学を望む企業は日本でどれだけ存在するのか。 |
| 回答 | 世界では企業のグローバル化が進み、イノベーションが加速している。産業界はこれを担う高度な人材を世界から求め出した。これまで日本では博士号取得者の活躍の場は大学や研究所に限られていたが、これからは米国のように活躍の場が飛躍的に拡大すると考えられる。研究職だけでなく、多様な職種での活躍が期待される。また自ら起業する道もある。そのためには博士号取得者が自分の専門分野に閉じこもって仕事をするという考え方から、自分の専門性を活かして、他の分野とのコラボレーションによって独創的な仕事をするという考え方に切り替える必要がある。 |
| 質問 | 採用したい人材とは。 |
| 回答 | 企業でも自治体でも採用したい人材は、その人が入ることによってその組織が活性化すると期待できる人だ。専門分野のスキルだけでなく、チームで活動するためのコミュニケーション能力やコラボレーション能力が高く、人とは違った提案ができる独創的な発想法を持った人は採用側にとって魅力的だ。またそれらの能力を裏付けるものとして学生時代に様々な分野でアクティブに活動できた人は採用したい人材だ。 |